
虹色想い?*。

涙夏?..

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色想い？*。

【Nコード】

N0627P

【作者名】

涙夏？．．

【あらすじ】

全ての人を愛し、全ての人に愛される。
そんな願いを込めて生まれてきた、虹歌。
空に架かる、儚く、それでいて、優しく包み込む。
綺麗な虹のように人を愛した虹歌は…、
ただ1人を愛していたのか…多くの人を愛していたのか。
ただ1つ．．．分かる事は…
虹歌はいつでも、全ての人を優しく…愛していた。

初めて見た虹。

おぎゃー！！ほぎゃー！！

「生まれましたよ、お母さん！ おめでとう御座います！可愛い女の子ですよ！」

「有難う…御座います。…本当に…ああ…虹歌。生まれてきて…くれて…有難う…。貴方は…全ての人…を、愛し…愛され…なさい。私は…貴方を…愛して…いるからね。…。」

ピ――。

「おい！ 愛歌！！愛歌！！ うっ…愛歌……………」

- - - - -

1997年、12月、18日。

いづか飯塚 にじか虹歌は、この地球に産まれた。

だけど、それと同時に、いづか母の飯塚 あいか愛歌は、この地球から、姿を消した…。

- - - - -

「良いか、虹歌。これだけは、絶対に忘れるなよ。お前は全ての人を愛し、全ての人に愛されなさい。それが、母さんの願いなんだよ（^^）？」

「うん…ぱぱ。 あたし、みーんなを愛すね（^^）！だから、ぱぱも大好きよ！でも、ぱぱ？ままは…私を産んだままは…何処へ

行ってしまったの？」

その質問に、ぱぱは答えてくれなかった。
まだ幼い、5歳の私には。

私が真実を知った歳は、12歳の・中学校の入学式の日。
やっと大人に成りかけた私に、ぱぱは真実を語った。

私は・ショックだった。私のせいで……ママが……死んだ。

私は……ママをコロシタんだ。
自分を悔やんだ。

「私さえっ、私さえ産まれてこなければ……っ。ママは……死なずに済んだ。私なんて……消えちゃえばいいのに。」と。

その日。私はお父さんに教わった。

初めて見る……虹を見ながら。

「虹歌……よく聞け。耳の穴かっばじってな。お前の名前の由来の話だ。虹歌の名前の由来はな？ 虹のように儚く・優しく・人を包み込んで欲しいという母さんの願いからなんだ。だから……虹歌は娘だけど、全ての人、つまり母さんの事も包み込んで欲しいんだ。その為に、虹歌は生きなきゃいけない。死んだらいけない。たとえば……何があるうともな。」

だからな？ 虹歌。自分を恨むな。自分を苦しめるな。だけど、本当に苦しい時。母さんの事を思い出せ。それで、自分を温かくするんだ。いいな？」

「う……。うん（……） もう、そんな事言わない。約束するよ。」

初めての虹に、私の名前の由来に、涙が止まらなかった事を・私は生涯。忘れないだろう。いや、たとえ命が終わりを告げてても。決して、忘れないであろう。

友達。

「ぱぱ！ 行つて来るねー？」

「おう！ 気をつけろよ？ 横断歩道は手を上げて渡るんだ・・」

「んもう！ 小学生じゃないんだからもうそんな事しないよ ！ ったくもう・・（・・ω・・）＝3」

今日は、待ちに待った入学式。虹歌は決めていた。

絶対、友達100人作る！ という、なんとも子供染みた考えを。 w

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「あつ！ 虹歌く！！！！ もう来てたんだ！！！！ クラス見た
???? あたしは？ ねえねえ！！！！」

この、妙にビックリマークの多い喋り方のうるさい女の子は、

神野 愛理奈。（かみの えりな）

小学校からの友達。

「お早う（^^） どうだった？ 見た？ チッチャイから見えな
かった？ 抱っこしようか？」

この、大人しい喋り方で背の異様に高い仔。この仔は、

松永 瑞樹。（まつなが みずき）

この仔も同じく小学校からの友達。

「やあやあ皆さんこんにちは ♪ 皆でうつたっおー ♪」

この、異様にテンションの高い仔が、
吉田 美優。（よしだ みゆう）
この仔も同じく小学校からの友達。

そして私、飯塚 虹歌。（いいづか にじか）

そう、この4人は、小学校の頃に一緒に行動を共にしていた人達だ。

「んー、何か皆いつも通り突込みどころ満載だけどー…今日は置いてこうか。うん。↑」

いつも通り4人は笑いながら歩いていった。

愛「アタシはっ、んー？あ。1組1組！…！！！」

瑞「うちは・3組だあ（^^）」

美「あー！愛理奈と一緒にだー！1組♪」

虹「…うげ。4組いー。誰ともなっていないぞーorz」

「元気出せつてb あたしも1人だよ？（^^）」
「うっす。気遣いせんきゅう。けど仲良い人いねーべw頭逝きそー。」

結果は、愛理名と美優が1組。瑞樹が3組。私が4組。
まあ。新しい友達出来るかな．．かな？w
なあーんて思ってた。

教室。

「ちよっ虹歌虹歌！！」
「ん？あ！こっちゃん！？」
「一緒だったんだよ？！ 絶対奇跡だと想っただけどー（<ω>）！！」

「だねだねー！ バスケ頑張ろうね！」

そう。早川^{はやかわ} 琴奈^{ことな}通称：こっちゃん
は、私と同じバスケット部志望の仲間！？
まさか一緒のクラスになるとは…！

中学と言えば部活！ 私は部活に精神を注ぐつもりでした。

「はい、席ついて〜」

担任が来た。

4組の担任は、例えるならばじゃがいものような…、
ぼこぼこの顔をしている不細工な男の先生だった。
これにもまたがっかりする私。

「良い先生の欠片もないねー」こそこそと話す私。
w

仲良し4人組とは離れ離れ。

おまけに先生は不細工。ほんとにツイテてない。
その時の私は憂鬱感でいっぱいだった。

大好きなヒト。

1年4組。教室。

- - - - -

「- - - - -って訳だ。これから、宜しくな！」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

案の定、初めての中学校に緊張気味の皆は、誰1人として先生の言葉に反応を見せなかった。

そして…肝心の私の隣の席の男子は…、

「よお。よろしくなーあ！」

「…またあんた?!面白くないなあー。」

「俺こそためーなんかと隣なんて嫌だぜ。名字が一緒だからって、何でも隣なんだからな…たまったもんじゃねーぞ。」

「こっちの台詞だっつーの(、皿、)」

この、悪魔みたいな口の利き方をする面倒臭い男子は…

飯塚 大志。小学校から何かとちょっかいを…かけられているのだ
orz

こんな所まで一緒じゃなくても良かったのだが…。

そんな中、私は複雑な気持ちでいっぱいだった。

どうして…私は新と同じクラスなんだろう。

新とは私の好きな人…なんだけど。

- - - - -

それは、小学校6年生の時の話。

私が好きなのは、沢渡^{さわたり}新^{あらた}。

最初は本当に全然興味が無かった。ただのクラスメイト…そして、
繭ちゃんの…彼氏。

ただ、それだけだったのに。

席替えをして、隣になったり近くなったり…そんな事が続いて、よく話すようになった。

その時の私は、あまり男友達なんか居なくて、その新鮮さが嬉しくて嬉しくて…

夢中で喋ってた。

いや…いつの間にか、新に恋をしてたのかな…。

その時から、飯塚にからかわれていた私は、飯塚と新と私。3人で喋る事も多くなってた。

飯塚はからかってくるけど、信用出来る男だから飯塚には話していた。

繭ちゃんの友達…なのに。

私に協力してくれてた。

そんなある日。飯塚と新が遊ぼうという話をして…

私は、美優と2人で図工に取り組んだ。そしたら…コソコソと聞こえた話の内容。

「ん…飯塚誘わねえ？」

「別に良いぜー。そうしょか^^」

…え？

後から飯塚に言われた。

「新から、お前の名前出てきたんだぞ（^^）！良かったじゃん。お前脈アリじゃね？ww」

「うっさいよ！／／／」
バコッ。

「ってーな。まあいいや。今日、帰ったらお前ん家行くから！あ。

誰か誘つといてー」

そんな事を言われて、結局、その時よく相談に乗ってもらってた鈴奈と私と新と飯塚で遊ぶ事になった。

幸せの絶頂だった。

好きな人と一緒に居れる…そんな幸せな事ない。

そう思ってた。それからだって、バレンタイン、ホワイトデー。私が渡してお返しを貰って…

それに、新から「頂戴。」って言われた。

私はもう、新に夢中だった。だけど…

他の人と仲良くしてるのを見て泣いている繭ちゃんを見て…あの言葉を思い出した。

「みーんなを愛しなさい…」

まま…。

—— その日から、私は新と極限喋らないようにした。

もう、繭ちゃんを苦しめてはいけない。彼女は私じゃない。繭ちゃんだ。

- - - - -

そう思って、私は身を引いた。だけど…

中学校のクラス替えの結果は、

繭ちゃんが2組。私と新と飯塚が4組と、凄く複雑な感じになった。

私はもう、どうして良いか分からなかった。

大好きなのに…だけでもう、話してはいけない。

そんな辛い思いをしてまで、新とは居たくない。だけど…どうしよう。

そんなうじうじした思いを抱えていた。

君と私に出来たキヨリ。

1-4-教室。

終業式終了。
係り決め。

私は、何の係りにするかとづくに決めていた。

大人しく見られる自分を変えたくて、私は「代議員」という肩書きを手に入れたかった。

こういふ係りになる人は、少なくとも明るい人間だ。

なのに。

「じゃあ、まず。代議員になりたいひ…」

「はいっ！」

真つ先に手を挙げる虹歌。

「おおつ　心強いな、さて。じゃあ女子は飯塚で決まりだ。皆、良いな？」

「はい」

皆、納得した様子だ。

そりゃそうよね。

皆やりたくなさそうだもん（＾＾；）

でも良かった
これで、新とは離れられ・

「じゃあ俺もっ！」

.....
?
!
!
?
?
!
?
?
!
?
!
?
?
?
!

手が上がった、その人物は・なんと――新

「はっ？！」

「ん？ 良いじゃん、べつつに♪」

「いや、別に良いけど… 何で新？；」

「何かおもしろそーだからっ！ 飯塚となら別にいつかなー みた
いな？」にかっ

ちよっ… その笑顔は反則だよ…。 トホホ(。。。、)；

そんなこんなで、私と新の2人が、代議員を勤める事になった。
最悪ですけど… w w

数日後。

「おい、木村ー！ お前口でけーんだよっ！」

「は！？ 意味わかんないんだけどー！ なんで沢渡にそんな事いわれなきゃなんないのぉー？」
「うっせーよ 口でか女！」

木村 柚月。 沢渡 新。

2人は、席が隣同士。

代議員が一緒になったからって、新が私と一緒に居てくれる訳じゃないのは分かった。だけど…だけど…

どうして、ユヅキナノ…？

繭ちゃんなら… 繭ちゃんなら… 私だって、あきらめられる。

彼女でもなんでもない柚月は、私から、いとも簡単に新を奪い去って行った。

その日からだ。

私と新に・キヨリが出来たのは。

復縁 祝えない私。

「木村っ・おい木村っ・□でか女あー!!!」

「んもおー! うるさいなあ(。3。;)!! 柚月は暇じゃないのぉ!」

「答え移させろって」

「嫌だよあー! 自分で考えればあ? あははっw」

「笑い方きもいから、うん。wwww」

「ひどっ! ちよつとことねー! 新がねっ・新がねっ・」

…新…か。

いつの間に…下の名前…。

もやもやもやしたままの私。

このままじゃ、いけないのにな。

だけど、私にも、切ない光が差した。

次の休み時間での事。

繭ちゃんが、4組の教室に来たのだ。

「…あら…た。久しぶり…だ…ね、」

「あ…ああ。ひさしぶり… ちよっ・木村お前何? 返せって! やーいつ!」

「ちよつと新あー!! あっ・繭! 言ってやって!! コイツね、

柚月の教科書奪うのぉー!」

「そ…っか。がんばれ…」。

「んもうつ! 彼女のくせにー! ガツンと言ってよぉ!」

完璧なるKY。 柚月、わざとしてるようにしか、見えないんだけ

ど。

折角、繭ちゃんが…

「ごめん、ことね。 教室 へ 戻るわ ばいばいっ」

「えっちょっと繭?! … 柚月。 ちょっとこっち来て。」

「ごめんことねえー、新が返してくれないんだもんっ!」
バコッ。

「ってえ… おいゴリラ! 何すんだよー! 木村がわりーんだって
!-!」

「うるさい。 黙れ。 柚月借りるから。」

そして、ことねと柚月は教室から出て行った。
おそらく、柚月に注意しているんだろう。
はあ。 疲れたなー…………。

- - - - -

次の休み時間

1 - 4、教室内。

「菅原ー。 これ、何?」

「新って頭悪いんやね。 これはこうでしょ。 あははっ w w」

菅原って誰って?

繭ちゃんですよ。 菅原 繭。

そう。この2人、元の仲良しカップルに復活だって。
まあ、元々別れてはないんだけど。

「「あははっww」」

「ちよっ・菅原返せやー」

「やだー！ 相変わらずちっこいね、背？ あはは 悔しかった
ら追い越してみな」

「あ？！ 言っ たなー！」
ガヤガヤ…

あーー。

頭クラクラするー… いらいらすぎた。
だめだ。繭ちゃんは、お祝い、しな、い、と……..
ボタン。

「「 きゃーっ！ー！ 」」

同情なんていらないわ・

「ん…ここ…ど…ここ？」

「あっ！やあつと目が覚めた！！もう、心配したんだからね？！」

「へ…？ あ。ごめん。」

訳も分からず謝る私。

どうやら、横に居るのはことねのようだ。

「あー…ことね、何で私、ここに…？」

「ああ。何かいきなりぶっ倒れたから。びびったわー w w」

「あはw そつかそつか（笑 ごめんね、心配掛けて*」

「ううん（-ω-）でも、1つ聞いて良い？」

「うん…何？」

…静かな雰囲気、流れる。

私の呼吸の音さえ、聞こえる。

い
ち
い
ち
い
ち
!
!

一瞬、ほんの一瞬。

次の日から、ことねは私に凄くついてきた。

「ねえねえっ、いい加減言ってよ？ 応援するからさ？」

「うん、ありがと。でも、おあいにくさまっ、ごめんね？ 新は弟みたいなもんだしw あははww」

「ほんとにほんと…？」

「何ター？！ なんのはっなし？？」

「朝からテンション高いねー、柚月は。あ、今はそんなムードじゃないのー！」

「で？ どーなのっ！」

「ことね。ちょっとトイレ行こっか。」
「はいっ？」

そして、私はことねに全てを話した。

「…って訳。別に隠したかった訳じゃないけど…なーんか言いにくくてさ。」

「そっかそっかあ。」

最後に彼女が発した言葉。この言葉は、後に私を裏切る言葉となる。

「頑張つてね（^^）♪ 出来る限り応援してるから？」
ねっ、
虹歌？」

ねえ、ことね。

最初から、同情なんて、イラナイノヨ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0627p/>

虹色想い?*

2011年10月8日10時57分発行